

Ward J, Clarke R, Linden R (著), 岡田隆夫 (監訳)

一目でわかる生理学

長岡正範 (順天堂大学大学院リハビリテーション医学)

私が、生理学の教科書を隅から隅まで読んだのは学生時代で、当時の順天堂大学真島英信教授の生理学が最初で最後であった。このたびその弟子にあたる岡田隆夫先生が監訳なさった「一目でわかる生理学」が刊行され、読む機会を得た。これまでもリハビリテーションの臨床で必要に応じて、生理学の部分部分の知識は読んでいたつもりだが、この本を読んで、この30年の間の生理学の進歩は大きなものであったことを改めて感じた。

私の専門とするリハビリテーションでは、これまでその対象疾患は、脳卒中、骨関節疾患がその中心であった。これらの疾患を学ぶために、解剖学、生理学の勉強をする機会は多くあり、参考書も少なくなかったが、生理学のテキストでは、神経科学、認知科学など神経や脳の働きに関するものが多かったように思う。

一方、2006年4月に行われた診療報酬改定では、疾患別に、脳血管疾患等、運動器、呼吸、心大血管疾患リハビリテーションが区別され、呼吸リハビリテーション、心大血管リハビリテーションでは、当然、呼吸機能や血液ガス交換、心機能、循環の生理学について学ぶ必要が生じてきた。さらに、近年の高齢化社会では、慢性疾患をもった高齢者が増加しており、高血圧、高脂血症、糖尿病の生活習慣病により、脳卒中、虚血性心疾患、大動脈の動脈硬化性疾患、腎不全、視力障害なども増えているため、リハビリテーションを受ける患者はこれらのリスク・ファクターをもっていることが多いと考えなければ

ならない。したがって、このような対象者の変化に応じてリハビリテーション専門職も生理、病態生理を正しく理解する必要があると言えるであろう。

「一目でわかる生理学」は、左の頁に図を、右の頁に解説を載せて、この2頁を読むと一つの話題が理解できるようになっており、短時間に新しい情報をつかむのに大変よくできた教科書と言える。図は、説明に沿ってかゆいところに手が届くように細かく描かれている。また、用語が日本語・英語で併記され、関連書籍から知識をさらに深めるのに役に立つ構成になっている。ただし、コンパクトに記載されているがゆえに、もう少し説明して欲しいところがないわけではないが、本書を通じてより大きな参考書を繙くための導入となれば良いのであるから、それは本書の編集趣旨から外れる過度な要求と言えるかもしれない。

世の中はゲノムの時代と言われて久しくなる。「ゲノムの解説は偉大な進歩であることに疑いの余地はないが、…生体の機能状態を知るためには、飛躍的に深まった塩基配列に関する我々の知識を利用しながら、ゲノムそのものよりも高いレベルで研究を進める必要がある。これが現代の生理学である」という生理学とゲノムの項での記述が、Ward, Linden, Clarke 博士が本書を著すことになった大きな動機の一つとで感じた。

〔A4変 頁148 図59 定価2,940円(本体2,800円+税5%) 2006 メディカル・サイエンス・インターナショナル刊〕